学生部セミナー「台湾へ行こう」 中山大の学生と活発に交流

寄稿

2013年度の学生部セミナー「台湾へ行こう」は、３月２日から９日まで、阿藤正道学生部長（商学部教授）ほか学生12人が参加して行われた。台北、高雄、台南などの各市を訪ね、国際交流協定校の中山大学（高雄市）では中国語を研修したほか、学生たちと活発な交流をした。また、台湾校友会のメンバーとの夕食会も催された。台湾の歴史、伝統、文化に触れ充実した８日間を過ごした。２学生からの寄稿を紹介する。

（９面に関連記事）

学ぶ姿勢に感心

歴史の一端を肌に

田代　文香（商４）

電車から左営駅に降り立つと、暖かな空気が流れてきました。その雰囲気にどこか懐かしさを覚えました。

中山大学は海と山に囲まれた広大なキャンパスが広がり、その様子に目を見張りました。ガジュマルやヤシの木があちこちに茂り、大きな校舎が点在していても圧迫感がなく、ゆったりとした時間の流れを感じました。

そんなキャンパスの一番高台にある文学院での中国語の授業は、和やかな雰囲気で進められました。レッスンは中国語のみで行われ、絵やボディーランゲージも使われました。

高雄市内観光ではフェリーに乗って寺廟へお参りして、砲台や灯台を見学。美濃では客家（はっかじん）人の文化を体験、昔は薬代わりに飲んでいたという擂茶（れいちゃ）を飲み、傘の絵付け体験もしました。

台南ではオランダ統治時代の城跡の安平古堡、孔子廟、さらには古い通りをアーティストたちが装飾した海安路芸術造街を見学。昔と現代の台湾に触れ、歴史の一部を肌で感じた体験になりました。

研修を通して一番印象的だったのは、台湾の学生の真摯（しんし）でひたむきな姿態度です。人に接するときの組み方など、明らかに自分とは違っていました。

私たちを迎えてくれたTA（ティーチングアシスタント）の3人はみな優しく、気配りの行き届いた人たちでした。日本語が分からなくても、たくさん話しかけてくれ、私たち一人ひとりに気を配ってくれました。バスでの移動中は日本語を覚えようと、メモを取って何度も練習していました。

中山大学の学生は図書館で夜遅くまで勉強しており、寮に帰ってからも勉強するという話を聞きました。

寮に行って実際に部屋を見せてもらったら、夜遅い時間にもかかわらず、みな勉強をしていました。

日本では就職活動のために勉強している人が多いのに、台湾では自分を高めるために勉強しています。興味のあるものは何でも聞いて吸収する姿勢を、私も見習いたいと思いました。

中国語に興味沸々

永島　裕之（経営３）

台湾には初めての訪問です。特に中国語の授業を履修していたわけではないのですが、昨年、ベトナムの学生部セミナーに参加し、さまざまな体験ができたので、今回も参加しました。

台湾は、南と北では気温差があり、洋服選びに苦労をしました。バスから高雄の街を見ると、日本の都市とあまり変わらずビルが林立しています。コンビニや料理店がたくさんあり、ところどころに日本食店なども見ることができました。

中山大学は港町にあり、キャンパスの目の前はすぐ海が広がります。大学の敷地の広さには驚かされるばかりで、構内に寮、コンビニ、歯科のクリニックなどがあり、一つの街のようです。また構内には留学生がたくさんいました。

中国語の授業では、先生が日本語はわからないと聞いていたので、内心びくびくしていたのですが、とても上手に教えていただき、中国語に興味を持つ良いきっかけになりました。

今回は、現地の学生やスタッフの方々に引率していただき、街を見学。英語とジェスチャーを織り交ぜて案内していただきました。街を歩いているとお店の人に気軽に声をかけられ、すてきな笑顔で応対をしてくれたのが印象的です。

今回のセミナーで私たちを世話してくれた学生たちは総じて優秀で、勉強に対して意欲的な人が多いと思います。もちろん日本にも意欲的な人はたくさんいると思いますが、そのような人と話す機会は少ないと思います。なぜならば、例えば、自分が漠然と大学に通っていると、どうしても似たようなイメージで大学に通っている人が友人になっていく。

その関係が悪いわけではありませんが、同じような目線で勉強する人にしか出会えないことが多いので刺激は少なくなっていくと思います。今回のようなセミナーで、自分と違う目線で勉強をする人たちに出会えて大きな刺激を受けました。

▲ 中山大学キャンパスで参加者の皆さん。右から５人目が田代さん、左から４人目が永島さん。背後に孫文と蒋介石の像が

▲ 高雄の淡水湖にある龍虎塔

▲ 中山大学内にある宿泊ホテル前で同大学の国際交流学生スタッフにお礼の品を渡す

新入留学生58人が参加

オリエンテーション

「新入留学生合宿オリエンテーション」が4月12、13の両日、伊勢原セミナーハウスで行われた。今年入学した中国、韓国、ベトナム、タイからの留学生58人が参加し、在学生や教職員から学業面、生活面についてアドバイスを受けた。

新入留学生たちは教職員や先輩学生を交えたグループディスカッションで日本での学生生活を知るとともに、歓迎会やゲームなどを通して楽しみながら交流を深めた。

▶ 歓迎会で親睦を深める

▶ 先輩学生とのグループディスカッション

第154回国際交流特別講演会

やさしい英語による経済学講座

国際交流協定校の客員教授が講師を務める5回シリーズの経済学公開講座。地域の方々にも好評で1回のみの受講も可能。第1回のテーマは「アフリカは平和と繁栄の新時代に向けて準備が整っているか？」

▽日時＝5月24日～6月28日（5月31日を除く毎週土曜日、全5回）10時～11時30分

▽場所＝生田キャンパス

▽講師＝アンディ・ストーレイ　経済学部海外客員教授（アイルランド国立大学ダブリン校）

問国際交流事務課 E-mail:iaffairs@acc.senshu-u.ac.jp ☎044・911・1250

外国語のススメ　外国語教育研究室

―●29●―

飯田　巳貴　商学部准教授

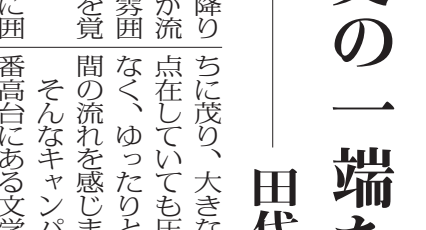
都市の国イタリア

イタリア半島では、５世紀後半から19世紀の半ばまで統一国家が形成されず、大小さまざまな複数の国家が群雄割拠していたことから、現在でもイタリア人の帰属意識は、国家よりも、全土で8000以上ある「コムーネ」にある。コムーネは、中世に北・中部イタリアで誕生した自治都市・都市国家を母体としており、「イタリア人」より、むしろ「ローマ人」「ミラノ人」といった帰属意識が非常に強い。各コムーネは各々の自然環境や社会システム、歴史を反映して自立性が高く、それは言語にも及んでおり、方言（＝地方語）が現代まで色濃く継承されている。

筆者がかつて２年間留学生活を送ったヴェネツィアは訛（なま）りが強い地域のひとつで、日本に留学したイタリア人によると、ズーズー弁に近い感じらしい。方言の使用程度は人によって異なるが、話し手の教育水準や家庭環境も影響している。現代でも階級社会の伝統が強固に残っているので、大学教授などは代々インテリ家系の出身が多く、あまりきつい方言は話さない。

とはいえ特に歴史学に関しては、いわゆる地方史が主体で研究者も地元出身者が多い。興が乗ってくると次第に方言が出る先生もいて、そうなると筆者のような外来者は話についていけない。またヴェネツィア名物のゴンドラ漕ぎは周辺の小島出身者が多く、彼らの言葉はかなり難解である。古文書館で読む中世の商人文書も、方言を基にした綴（つづ）りで書かれていることが多く、字の書き癖とともに、いまだ頭痛の種である（主な担当は商業史）。

※短縮版。全文はCALL教室ホームページで。



▲ ヴェネツィアのサルーテ教会とプンタ・デッラ・ドガーナ（税関岬）